

高齢者だけでない若年層の孤立化

キーパーズ代表取締役 吉田太一

東日本大震災から一年が経とうとしている中、最近は孤立死についての講演の依頼が急増してきています。

孤立死や孤独死が頻繁にメディアに登場するようになって10数年。

様々な変死現場に足を踏み入れ部屋の遺品整理を行ってきたが、そこには多くの共通点がある事に気付きます。

そして、幾度となく現場を思い浮かべて行く中で、何気なく使っていた言葉でどうしても引っ掛った言葉がありました。

「孤独死」という言葉。

人は言葉の意味や出来ごとの意味を、その都度確認する事も無く固定概念によってその場を過ごしている事が多い。

私自身も生活の多くが、無意識のうちの行動や発言によって成り立っていると云えます。

しかし、自分の専門である遺品整理やそれに関連する事がらを第三者に伝える時には、説明のつく言葉でないと無責任に伝える事は出来ない。

そこで、私は「孤独死」という言葉について深く考えるようになりました。

本当に故人は孤独だったのだろうか？また、孤独感を持たない人間なんて存在しないのではないのか？故人に対して孤独と決め付けてしまっても良いのだろうか？と様々な事を考えるようになったのです。

さらに、「孤独」ではなく、「孤立」こそが現代社会において大きな社会問題になりつつあるのではないかと考えるようになりました。

社会や地域から孤立していた事実は、客観的に確認のできる事であるので、このような故人の死を「孤立死」と表現することが適切だと考えるようになったのです。

更に、孤立死は独居老人に発生する可能性が高いと思われているが、私たちが訪問する現場では50代男性の孤立死が非常に多い事にも気付いた。

もちろん死亡率は50代よりも65歳以上の高齢者の方が高いので、孤立死の全国的割合は高齢者の方が高い可能性があるが、私たちが関わる現場は月によっては高齢者よりも50～64歳までの孤立死だと思われる現場が上回る事も頻繁にあるのです。

どうしても高齢者に向きがちな視線を、少し下げてもらいたいと思う。

特に男性の50代のリストラ組の単身世帯の場合、経済活動以外の話題を全くもっておらず、住まい周辺での御近所付き合いも全くないという人が非常に多い事がわかる。要するに、プライベートの生活時間を共有する為の話題や友人が存在しないまま我武者羅に働いていた人たちがその年代層に多いのです。

更に恐ろしいのは、40代以下の人達が現実社会のコミュニティには属さず、バーチャル（仮想）の世界のコミュニティに依存している割合が非常に高くなっているのが現実です。

この世界は、スイッチをオフにするだけですぐに嫌なことから逃れられるので、対人関係を学ぶ機会を失っていつているのです。